

與那覇潤著

## 『翻訳の政治学』

——近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容』

(岩波書店・二〇〇九年)

菊部 直

近代日本におけるナショナリズムの形成と展開は、一九九〇年代以降、多くの研究者の関心を集めている。ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』（原著初版の刊行は一九八三年）の日本語訳が一九八七年に出たことや、冷戦の終了とともに東欧・旧ソ連の民族紛争が注目を集めるようになったこと、また、日本と中国・韓国との間の外交問題として、植民地支配をめぐる歴史認識に焦点があつたこと。いまふりかえれば、そういった状況が背景になつていたと言える。

したがって、この主題に関する研究は、政治史・思想史・文化史や、社会学・メディア研究など、きわめて幅広い分野で、大量に刊行され続けている。いまや、その全体を見わたすことすらむずかしい。與那覇潤は、地域文化研究の大学院に学び、日本近現代史を専攻する若手研究者である。こうしたナショナ

リズム研究の波をはじめから受けながら、研究者としての訓練を積んできた世代が、まとまった仕事を刊行する時代に、いまや至っている。そのことを示す本と云つてよい。

しかも対象としているのは、「日本人」の国民形成でも、台湾や朝鮮における、日本の植民地支配とナショナリズムとの対抗でもない。琉球弧（沖繩）という、日本本土との関係をめぐり独特の歴史をもった場所において、「琉球民族」というアイデンティティが近代においていかに形成されたか。その過程を動かした複数の潮流の間に、どのような力関係、すなわち「政治」が働いていたか。そういった問題につき、膨大な関連史料の精査を通じて分析を試みた仕事である。目次は以下のような

序論 「同じであること」と翻訳の政治

第I部 「人種問題」前夜——「琉球処分」期の東アジア国際秩序

第一章 外交の翻訳論——F・H・バルフォアと一九世紀

末東アジア英語言論圏の成立

第二章 国境の翻訳論——「琉球処分」は人種問題か、日

本・琉球・中国・西洋

間章α 国民の翻訳論——日本内地の言説変容

第II部 「民族統一」以降——「沖繩人」が「日本人」になるとき

第三章 統合の翻訳論——「日琉同祖論」の成立と二〇世

## 紀型秩序への転換

### 第四章 革命の翻訳論——沖繩青年層の見た辛亥革命と大

#### 正政変

#### 間章β 帝国の翻訳論——伊波普猷と李光洙、もしくは国

#### 家と民族のあいだ

#### 結論 翻訳の哲学と歴史の倫理

この本の題名は「翻訳の政治学」であるが、副題を見ないかぎり、これが近代の「日琉關係」をめぐる本だとは誰も了解できないだろう。各章の題も、「翻訳論」への統一にこだわったものになっている。「民族」のアイデンティティ形成をめぐる研究に、どうして「翻訳」の語が強調されるのか。実はそのことが、この本の方法を大きく特徴づけているのである。

## 二

全体として見れば、この本は二つの異なった角度から問題を照らしだす形でできあがっている。第一は、中国王朝をゆるやかな中心とする、前近代の東アジアの国際關係に慣れていた日本政治家・思想家たちが、近代西洋の国際体系をいかなる形で受容し、発想の転換をなしていったのか。そして第二に、やがて自分自身で植民地を領有するようになった日本帝国において、植民地支配の下に編入された人々は、伝統的な王朝秩序から、帝国内で独自性を保つ「民族」としてのアイデンティティ

への転換を、いかになしてあげていったのか。この本の構成のうち、第Ⅰ部は前者の角度から、第Ⅱ部は後者からする歴史叙述になっていると言える。

一見すると、この二つの問題はそれぞれ別個のもののように見える。片方は国家どうしの間にある秩序をどうとらえるかであり、もう片方は日本という国家に新しく併合された地域に暮らす人々の、自己意識のあり方を対象とする。

だが、この本の第一章が示すように、日本の外交当事者が第一の問題を最初に自覚したのは、琉球王国の帰属をめぐる、清との対立を通じてであった。また、琉球弧は台湾・朝鮮と同じ意味で植民地とは呼べないにせよ、日本本土とは異なる文化をもち、独自の王朝の歴史をもっていたにもかかわらず、明治政府によって強制的に併合された点で、そこに暮らす人々は、植民地が抱えたものと同じ問題に直面し、日本帝国のなかでの「琉球民族」のアイデンティティのあり方を模索することになる。このように、二つの問題がちょうど交錯する位置に琉球弧はあった。この場所に目をすえて、近代日本の「帝国」秩序が全体として抱えていた問題状況を、この本は明らかにしようとする。

序章では、「翻訳」という営みに注目して本書を叙述することについて、方法論上の位置づけを行なっている。たとえば薩摩の大名、島津義久は、琉球を島津氏の「与力」と認めた豊臣秀吉の朱印状をもちだし、日本の武家社会の用語である「与

力」を、東アジアの朝貢冊封圏の概念である「附庸」の語へと、「読み替え」すなわち「翻訳」を行ない、琉球王国に対して薩摩の支配権をうけいれさせた。さらに明治政府は、西洋語の概念で言う日本の「領土」の一部として、琉球弧を言い表わすことに腐心するようになるだろう。

こうした過程には、当然、翻訳にともなう意味のずれが生じる。しかしそのずれを利用しながら、明治政府は国際社会に対して、琉球支配の正当化を図っていた。まず、そうした側面での「翻訳の政治学」が、第一部の焦点となる。

この第一部は、一八七九年の沖縄県設置を中心とする「琉球処分」をめぐる研究である。第一章は、北京で日本公使館に仕え、英字新聞における情報操作を担当していた英国人、フレドリック・ヘンリー・バルフォアの論説を分析することを通じて、「翻訳の政治学」の具体像を示す。

伝統的な東アジアの国際世界では、各国はおたがいの位置づけをそれぞれ勝手に解釈し、それを伝え合うこともないまま交流を続けることで、国際関係がなりたっていた。これを與那覇は、「自覚的な弱弱問答」と、落語のたとえを用いながら面白く説明している。しかし「開国」を経て、西洋の国際体系という一元的な秩序を受容する営みは、そうした多義性のままに国際関係の理解をとどめておくことを許さない。各国の言葉や認識を、西洋語の概念にどうやって「翻訳」し、国際秩序のなかにみずからをどう位置づけるのか、「翻訳」を通じた自己主張

が必要になるのである。

そこで日本政府と、その清朝に対する説明書の英語訳を担当したバルフォアは、清朝が主張する琉球に対する保護権について、西洋の「領土」概念を用いて説明しなおし、「藩属土」は「領土」に含まれない以上、そうした権利は認められないとした。そして、そもそも薩摩藩が征服したときから、琉球は日本の「領土」に含まれていたという論理によって、「琉球処分」を正当化したのである。

しかし、こうした論法を清朝に対して明確に述べるまでには、明治政府の発足から十年以上もかかっている。琉球の帰属をめぐる、東アジア国際世界での認識の多元性をのりこえるのは、それだけ困難な営みだった。

第二章ではさらに、この「琉球処分」にさいして、日本政府がどのような論理によってそれを正当化していたかを、詳しく分析している。従来の研究は、琉球処分官、松田道之が琉球国王である尚泰に宛てた書簡（一八七五年八月八日）に、「人種」の共通性についての言及が見えることに着目し、この時点ですでに、「人種」もしくは「民族」の同一性という虚構を明治政府が作りあげ、琉球の併合を正当化したと論じてきた。戦後歴史学においては、これが真の「民族統一」と呼べるか否かという問題が提起され、さらに一九九〇年代以降、ポスト・モダンの視角に基づく国民国家論の研究動向は、「真の民族統一」なる設定そのものを虚構とみなすことで、このような歴史理解を

さらに強めてきた。

だが與那覇によれば、この松田書簡の内容の全体から見れば、「人種」の共通性への言及は、あくまでも付随的な根拠として、しかも「地理」「風俗」「言語」と並べてとりあげられているにすぎない。そもそも、ここに見える漢語「人種」は、当時の用法としては、生物学上の起源論・系統論と結びついた、西洋の「race」概念とは重ならないからである。

さらにそもそも、異民族支配王朝であった清朝が、「華夷」の区別は「礼儀」によるものであって「種族」の出自は関係がないとしたことに表われているように、旧来の東アジアの国際関係の理解においては、いわゆる「人種」や「民族」の違いは問題とされなかった。当時の西洋の国際法体系も、「国家」(state)と「民族」(nation)とを区別し、一つの「国家」のなかで複数の「民族」が混在するのも当たり前と見なすものであった。日本政府による琉球併合の正当化は、琉球が日本と清の双方に「両属」することなど、国際法上ありえないという論理を、あくまでも中心にしていたのである。

間章<sup>a</sup>は、「琉球処分」後の日本内地における、「日本人」の自画像の成立過程を、「血統」「人種」「文化」の概念の形成史に即して検討する。徳川時代の儒者が、異姓養子の慣行を批判していたことによく表われているように、日本の「家」は血統を重視しないところに特質があり、そのことは明治初年の日本人にも自覚されていた。

しかし民法の制定を通じ、西洋の血統重視の家族法を導入することになると、問題が生じてくる。実は、民法典論争において「伝統」重視の立場から当初の草案を批判した穂積八束は、むしろ従来の「家制」と「血統」との食い違いをふまえ、折衷を図ったのであった。すなわち、実際の「血縁ノ濃淡遠近」にかかわらず、「血族」や「祖先」を同じくするという「精神」を共有することが、「家」の条件だと説くことになる。また、十九世紀末に「race」の訳語として「人種」が用いられるようになったさいにも、それを主導した坪井正五郎の意図は、「人種」の区別に意味はないという主張と、実は結びついていた。

しかし、穂積や坪井の努力はやがて、彼らの意図をこえ、日本社会が血統を重視するという虚像や、生物学的な血統と結びついた「人種」観の流布へとつながってゆく。次に大正期における、ドイツ由来の「文化」概念の輸入をとりあげたところでのこの章は終わっているが、それ以後、普遍的な「文化」と対になる「自然」としての、特殊な日本の「人種」「血統」の連続性という発想が定着していった。そういう理解が、含意としてはあるのだろう。

第Ⅱ部は、このようにして形成された日本人の人種性・民族性についての言説が、沖縄県設置以後の琉球弧に受容され、現地の人々の認識を変えていったようすを明らかにする。その過程で、当初は人種・民族論とは無関係であった琉球帰属問題は、しだいに「民族統一の課題」として語られるようになる。しか

もそれは、日本政府によって公定のイデオロギーが教化されたというのではなく、むしろ琉球知識人たちがみずから、「帝国」の秩序のなかで「琉球民族」のアイデンティティを積極的に定義しようという努力によって、進んでいたのである。いわば、「人種」論・「民族」論に関する、さらなる「翻訳」の試みであつた。

第三章は、東京帝国大学で人類学・歴史学を学び、その言説を故郷沖繩に移植した、伊波普猷、東恩納寛惇らの知識人の言動をめぐる分析である。彼らは、みずからが学んだ「人種」観や神話研究に基づいて、十七世紀の琉球の宰相による文書『羽地仕置』や、源為朝の渡琉伝説を新しく読みかえ、「沖繩人」は「日本人種」あるいは「日本民族」に属するという、いわゆる日琉同祖論の論理を作りあげていった。

第四章は、伊波や東恩納のように「民族統一」として「琉球処分」を正当化した営みとは異なる形で、大正期の沖繩の青年層が、日本への同化を基礎づけようとした作業を検証する。彼らは『沖繩毎日新聞』の新聞論説で、同時代の辛亥革命の動向、そして内地での大正政変に注目しながら、中華帝国による専制から離れ、人道主義の理想に基づく「革命」に近づく第一歩として、「日本化」を選び取るという姿勢を示したのである。彼らがめざしたのは、「立憲国」である日本国の一部たるにふさわしい「新沖繩」であつた。

間章は、伊波普猷と、朝鮮近代史において「親日派」と規

定されている李光洙との比較を通じて、第Ⅱ部で見たような営みを、広く東アジア世界全体の中に位置づけようと試みる。彼らはそれぞれに、帝国による支配という現実を前提としつつ、しかしそれを単に追認するのではなく、その中で「民族」の理想を実現するという抵抗、いわば「帝国の翻訳」を敢行していたのである。

結論では、「翻訳」という営みに関してさらに考察を加え、それが自他の文化の境界をのりこえ、新しい世界像・世界史像を切り開く可能性を指摘して、書物を閉じている。以上がこの本の大きな内容である。

### 三

先にふれたように、近代日本における植民地支配の問題と、その下での被支配民族のナショナル・アイデンティティ形成は、近年注目を集め、盛んに研究されている分野であるが、沖繩という、帝国本国と植民地との中間に位置する、いわば曖昧な場所に視点をすえたところに本書の特色があり、そのねらいは、かなりの程度成功している。琉球の帰属をめぐる日清両国の交渉の過程で、西洋の主権国家像の独自の受容がなされていることや、日本本土の知識人の「人種」「民族」をめぐる言説が、「琉球民族」のアイデンティティ形成の基盤へと変わっていったこと。そうした指摘を通じて、日琉関係の問題のみにとどまらず、日本の「帝国」秩序の自己意識がどのように成立してい

たのが、さらに明確にわかるようになった。

日本帝国による沖縄の支配や、伊波普猷による「日琉同祖論」の形成については、すでにポスト・モダン、ポスト・コロニアルの視角からする研究が盛んに取り扱っている。しかしそうした研究は、支配の暴力性を強調するせいで、権力の力強さと、その圧力に屈するしかなかった沖縄人という歴史像を、かえって大きく補強してしまう。そうした與那覇の批判意識は痛切である。

第三章で扱った、伊波普猷らによる学術活動と、第四章における『沖縄毎日新聞』の論説について、與那覇はこう語る。「確かにそれらはいずれにせよ、実際には単なる権力政治によってなされた『琉球処分』に対する、事後的な意味づけ、正統化であるには違いない。しかしながら事後的に意味を与えてしまうのは翻訳の宿命であって、それ自体として非難されるべきことではなく、むしろ重要なのはそのような正統化によっていかなる批判が可能になったのかを考えることの方である」(二六七頁、傍点を省略した)。

思想史の研究は、ともすれば過去の人々が置かれていた現実状況の重圧を見失なつて、彼らに過大な理想を期待する、ないものねだりに陥ることがある。そうした上すべりを慎重に避け、表面では現実への迎合と見える出来事のなかにも、意味ぶかい「批判」の可能性をよみとる。この本で著者が示しているのは、そうした鋭敏な感性にはかならない。

最後に疑問を二つ。「草昧ノ古ニ当テハ事皆ナ神義ニ厲シ、人智事理ヲ以テ推論ス可ラサルモノアリ」として、琉球の開闢神話を「琉球処分」の正当化に用いることを否定した、松田道之の書簡(一八七五年九月一日)を、この本では再度引用している(八〇、一五二頁)。だがここに見える「神義」の語は、おそらく書簡原本では「神異」とあるのを、引用刊本の校訂者が読み誤ったのではないか。論旨にかかわることではないが、その方が史料の文意が通る気がするのである。

また、歴史理論だけでなく、社会学・文化人類学・哲学などさまざまな分野の理論を引照しながら叙述を進めているのは、著者自身の思考の道筋を知る助けになるし、「翻訳」による抵抗の意味を、H・L・A・ハートの法理論を用いて説明したくだり(一八三頁)のように、説明の説得力を高めている箇所も、随所に見られる。しかしたとえば、「金城哲夫という、おそらく日本で最も影響力をもったSF作家」(一八六頁)まで登場させるのは、はたしてどうなのか。評者は大いに楽しみながら読んだのだが、まじめな読者のうちには、ペダンティックにすぎると感じて、怒る人も出てくるのではないか。意欲作は、時として理解されにくい場合もある。

(東京大学教授)